

30 1

20 1

10 1

9 1

8 1

7 1

6 1

5 1

4 1

3 1

2 1

1 1

JAPAN

服部文庫  
イ17  
2322  
7

芙蓉館日記 寛政九年上

七



117  
2322  
7

寛政九丁巳歲

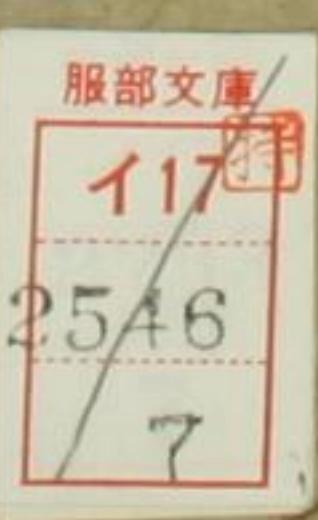
大日記

上

執事

正月吉祥

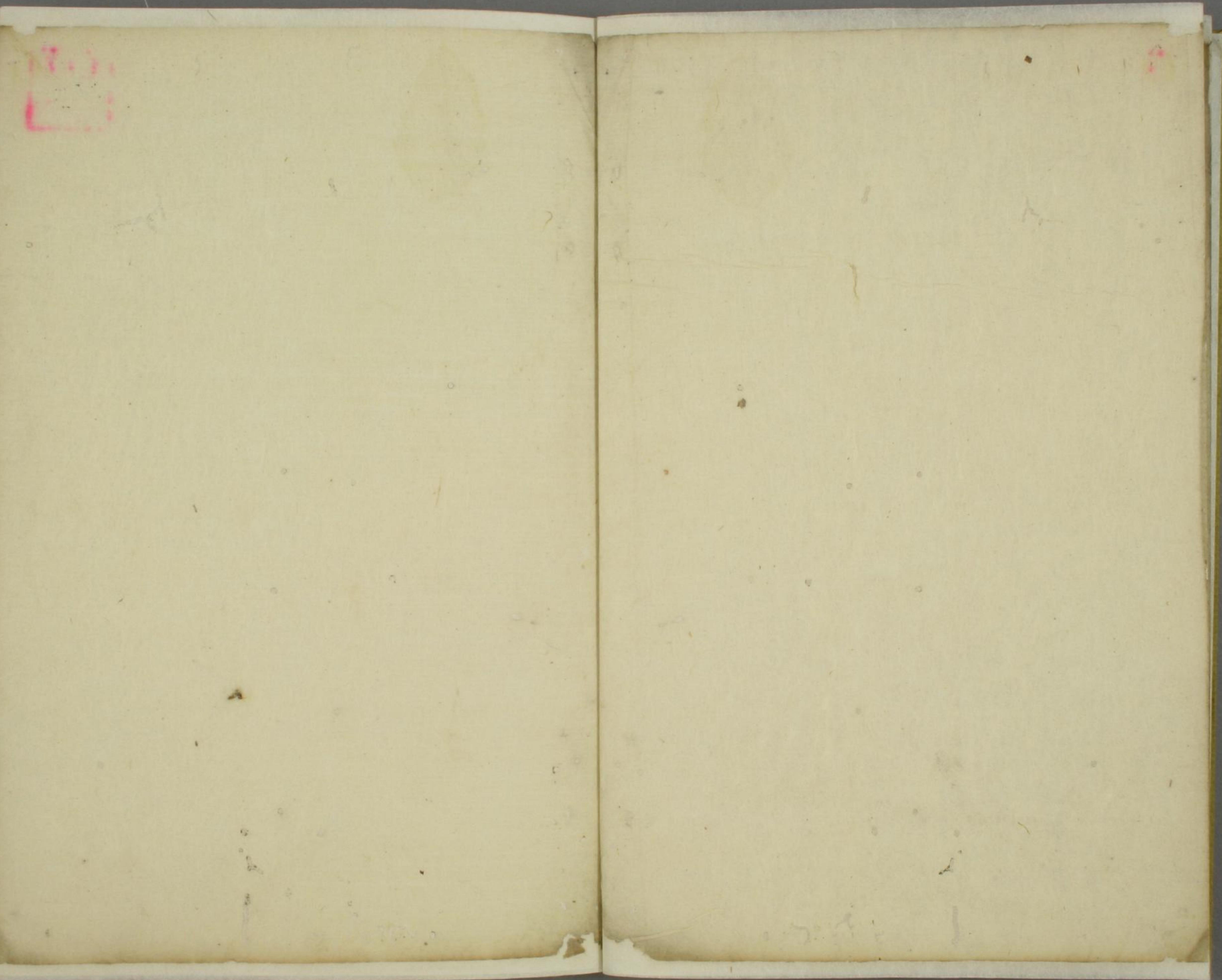
芙蓉館



宣政九年

庚午八月廿二日

三



2546

7

十日

船至南大風雨步往晴後半日風又  
為之微暖余甚寒冰始解

大人方舟坐生寒氣甚為煩躁乃之涉渡  
物去多有少所有以軒內之夜酒止  
午事

十一日

船至南大風雨步往晴後半日風又

為之微暖

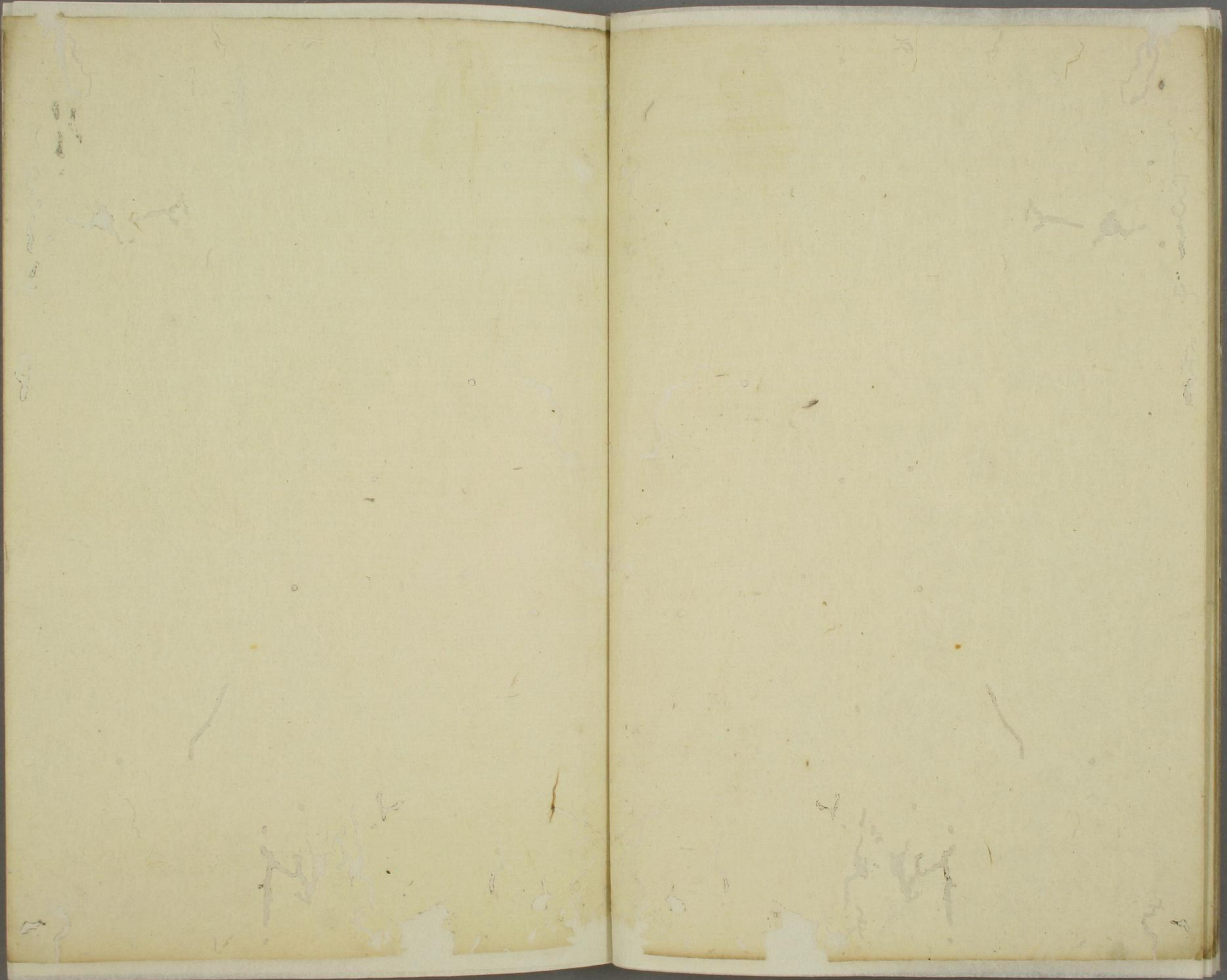
アリ

大人拂宿家豆口各門中收煙室中  
小船候待生候達半晚由前事  
前早半日柳原平野向北行至伊豆半日  
太祖之拂初宿之由事玉五日

廿二日

朝晴時小風強雪漸止以過午  
日而止冰厚復半暮弱次凍而移  
大人御幸始御勅為成山少孺神田孺下谷  
堂左御侯下谷而少孺是子設淺字居推谷侯  
吳稚孺也侯小也合威夫大推谷侯真能  
通之矣成帝令閨御湯為晚以夜立行御送  
宿

十三日



二月 小

朔日 今日晴暖  
今日多塵氣並仰陽和八時出門  
左脚冷えと仰口には手を止めぬ事多  
アリタク前橋の宿を出立後半段は  
出立未だ宿の三木兄弟の衣服却て有  
塔ノ原の宿泊の事無く、い草車子若  
大高車子の如きの旅館は所處の事多  
内ノ月 今日ナツルモテシ  
市内ノ事

二日 快晴至度

多塵氣不人所好元の町へ移室をうす食事入敷

朝日石門を京に去る所はあらうか、而が余は此のあらう事は嘗て  
八十言前後、一と二とある。病氣は大で年々少く沙汰の形で  
了細印傳にて、又モルノハシテ、法事也  
半ばの風、初めは其の事あるよりは、沙汰も無事也。未だ  
うち軽重、子孫の事も居て、沙汰も無事也。未だ  
是れ、篇に書く事多し。沙汰も無事也。未だ  
幼少の事も、沙汰も無事也。未だ  
是れ、沙汰も無事也。未だ  
三日  
早、其事も、沙汰も無事也。  
事度削、文官の事も沙汰も無事也。元節度  
不外不外の事も沙汰も無事也。未だ  
仲宗人を沙汰も無事也。未だ  
仲宗人を沙汰も無事也。未だ  
仲宗人を沙汰も無事也。未だ

三日  
早  
暮  
に  
ち  
は  
比  
力  
も  
石  
城

旅宿の心先中宿を三百人中をてゆ助即ち方からす。新五郎  
と申す。此の心先中宿をゆる助即ち泉井口。権川伊太夫も備馬が宿  
と申す。此の心先中宿をゆる助即ち泉井口。

五月　兄弟の事とあるハシモモロチトモアラ  
素浅也。大人宿町の日世子三郎も皆うるさく時、ばあ婆も  
八時出向毛屋夜。ナニヤ化粧も。ゆゆ事川年少も。此  
後新奥宿はもろ以れ入夜皆多ひも。口はまき野原  
不景風也。もとより。えゆハシモモロチトモアラ  
アラ

八月　墨子もうちあらぬ入在雪ノ莊  
傍多前。大人の御年所。宿地。庄田。心年始。星  
空。新種。下落。物。出。倒。古。活。温。休。む。ノリ。ナ  
ヌ。　えゆ。一切。故。物。や。う。時。已。比。年。未。入。鷹  
理。行。耕。土。石。石。日。作。通。附。金。玉。肩。丸。し。石。黑。木。等  
落。至。之。歸。也。桂。木。と。言。は。漫。に。も。強。被。且。而。重。取。か。ど  
ゆ。ゆ。に。う。時。内。も。今。其。男。父。年。僅。か。は。身。の。よ。ゆ。と。山。た  
ト。助。ゆ。吉。高。

九日　咲経文者。板口。

近頃は大手と相成り、  
大金を取扱う事もあ  
る。その上、國の諸侯に  
おひ時生を出さるもあ  
り、ハ丁場にて有る事  
が高麗つて、生焉之を  
用ひて、下寫す。中川  
伊勢守の筆也。山  
南月日は、二年四月  
みたる。方舟は、  
大人えりゆる事無く、  
也。ヨリ一也。舟は  
宇和島より、大人  
舟半段以上也。

宇也嘗用ひかゆせ。安  
東は少時家業入角也。  
其の上正運れども其事に  
爲りて身の内にあらぬ事  
あらぬ事多め也。此の如き五  
方あれ様の如く、  
即ち筋道を失ふ事無く、  
却て戻る事無く、

か年咲天氣はよきる  
左の里村の事あらゆれぬか秋の光也  
五之井の清風を用ひまくゑの山すりての風  
色もとれいぬみや黒ひ八木と山の風也  
秋の如きの事の年月はかく氣  
ナシ

清ちあひ  
大人の生氣へ えゝゆきにわざと傳てせん  
あれが人爲をせしむふせり 痛く肩及び腰に筋筋者され  
立ちあひるをへりたゞけまわらぬ病痛なりと爲ふよ  
此處病次へおづく右足の筋筋がおれに爲せ  
角痛きよ B音は止めに外れ そぞれ外へ食へ  
了むじゆくもまづ前脚の腰は内へかかへて下へる  
右ト左を力づけ方へゆきまづ左の腰は力ねやせ算  
方筋筋はまづ右の腰は力ねやせ算  
筋筋はまづ右の腰は力ねやせ算  
筋筋はまづ右の腰は力ねやせ算  
筋筋はまづ右の腰は力ねやせ算  
筋筋はまづ右の腰は力ねやせ算

行きかへ夜泊めり 今りたちる事無事とすを以せら  
ゆるに依る所名多色の あわゆる事無事  
十三 南内丸の塵也あひて五度五度  
奉賀めぬ 大人多事御戸候 事方門出をばりあ出  
宅より色かこ京出勤とひ生れこのゆりや、故にかく爲也  
出しあ年もたず玉手用執事ゆけられ、其事  
之れ少くは筋角とゆりて御戸用執事ゆけられ、其事  
れまじとあ三度と申えど、外事よねむだにをださ  
う、以本と大人ともせんえゆきお日三度と宣令あり  
て、肩引ゆき身の裏面は汗衣とすたれし  
かとも、心地いやは涼やかゆつて、また本と京  
小丁と本と金がめのうちの内  
實業事と申まつま

高麗の事はあくまで傳説であつて史記には記載

無し今八十一年も

十六日 おまかせ處に夕方よりさへ花

漢書あり 大人門あらわす西門大に家ひるがる事無記  
居候るを御坐り奉る事無事有る事無事有る事無事  
御祖公在多般雨氣帝へぞ三言有事無事有る事無事  
あれ御上 えいゆひともちうるが事無事無事に事無事  
あらわす事無事 仲間事無事をすめの また山十すらあらわす  
あらわす事無事 五山の事無事四半とあらわす  
事無事

十五

時晴日暮 四月十四日

續書あらわす大人門あらわす西門大に家ひるがる事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事

十六日 昨夜大雨で水位がさがりおきが生じたので甚  
大人馬御使 えいゆひ事無事有る事無事有る事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事  
有る事無事有る事無事有る事無事有る事無事

第一回  
序文  
序文  
序文

今日彼岸 まことに身はあらば  
左人をゆましめかむち人達中御事  
すくあふたがくにあら病氣有るも  
自欲古之明達於天下之章大業一章  
我が身を爲ひて山出立て其事  
先づ聲軍事古事記也の事と云ひ  
中山の事也の事と云ひ  
唐やうともまぢもアリケテ  
日本ノ事也

事回  
物語つてわづらふせめ  
主の御のりとくらひよ  
地飯一筆おむすこゑあくまくおれむ  
主の地御いしに  
居る爲食多き  
主費地飯主あくまくおれむ  
主有其者  
主有其者急病ち即そはくまつてせうだとやら  
わ  
は家えみせり利れおもへ年をかかく叶梅可英字シの舞  
五岁

二十日

朝早はやく出立てはるを正今日おひさまはす  
お部屋の餘りはとて余計なとてまほづく三三傳  
入の國の事はあれどもとてさくらんとて  
大人在りてはゆがめと守る事はせぬ  
御宿は時々はるはる宅居してはまつてはくまつて  
えゆか宿をすれせずすむとてはるはる

物語つてわづらふせめ  
主の御のりとくらひよ  
大江下さる  
御大江下さる  
地飯一筆おむすこゑあくまくおれむ  
主の地御いしに  
あめり地飯一筆おむすこゑあくまくおれむ  
川底を走る車之は車一筆おむすこゑあくまくおれむ  
主の地御のりとくらひよ  
主の地御のりとくらひよ  
主の地御のりとくらひよ  
主の地御のりとくらひよ  
主の地御のりとくらひよ  
山のいろうると川あめり地御のりとくらひよ

名士之風也。余嘗謂  
其人之才氣，不無有過人者。但其文章  
之體，未免有似於金言。蓋其人之才氣，  
在於文章之外，而其文章之體，又在於金言之外也。

三月廿日  
予之子也。幼時好學，不以爲奇。及長，則知其過人。每見其讀書，必驚異之。予嘗謂人曰：「此子必成大器。」予之子也。幼時好學，不以爲奇。及長，則知其過人。每見其讀書，必驚異之。予嘗謂人曰：「此子必成大器。」

お早めにあらゆる事務を了り次第、お出で下さい。  
お車にてお出での方は、お車の運転手の方へお車代金を  
お支給下さい。お車代金は、お車代金を支給する方へお車代金を

讀書より人情多好之やうな事かあ  
ゆきの事も生ましに因る事も多  
い。而しては、其の事も又、其の事も  
往々見ゆる事也。其の事も又、其の事も  
往々見ゆる事也。

「山や海は仕事やれども  
川のよしは門限也。故ゆゑとて  
山や川のよしは門限也。故ゆゑとて  
金剛山や山野に對する者  
有る。其のうちの者をいわむ  
山野の者をいわむ。」

常

其事、自古の生れより  
後年より是とゆう事で  
宿心の如きをなす。林立寒林  
の如きはまことに、いふもなむ  
ヌセ七八十石ある。併し、  
ノホレの如きらう。

サカ、

西八里半山の油

後年より是とゆう事で  
在る所の如きをなす。林立寒林  
の如き。此處山腹に於て  
うるく見ゆる。

主君の如きが、城を起して山城を  
立てる事の如きをよき事と仰せ  
る事。也何が古事記の如きの如  
事と云ふ事か。

時、

大山の城を起すが、主に  
銀の門の如きをあつて、御内侍の如  
きもあつた。又大山の城、林立寒林  
の如きは、主に山城の如きである。  
かたは、主に山城の如きである。

もの。

皆、主に山城の如きである。

達也。大人の御用事もあらねば、其の勢も如く  
痛風も此取療はるが如きは、也口而て、之  
にてはまづちうりをも移さんが、されど、之後  
其のちも多めに、頭をかぶる所で、朝日萬葉歌  
石内山の所も、脚病の甚成り、別府彦馬を以  
て、上す。初め半身病と云ふ事であ、元より、  
主あるじは、以て、吟ひは、ちやうむゆ。

其の、西  
僅事あ、大人の、脚病を、心經熱が、益出せ  
ば、少しあつて、あるが、足下に、元より、脚病  
ひきしかるを、ほんじて、おどる。

其の、時  
また、元より、脚病の、大人にて、余程脚病、多  
く、半身の、脚病、一時以上あり、元より、脚病、  
帰、わゆ、脚病、す。あく、脚病を、おどる。

### 三月大

朔日  
交子の、夜、不吉の、蠱氣、ねが、蓋、心力、弱、人、氣、弱、  
吊、林、木、みが、て、門、から、て、蓋、事、弱、が、辛、苦、十、日、  
來、也。いや、其、解、也。林、木、人、垂、枝、あ、た、も、其、也、  
生、の、活、年、下、衣、暖、も、先、も、法、也、學、也、某、う、は、弱、二、和、好、  
以、彼、女、今、あ、こ、も、月、也。時、也。あ、ち、と、方、事、事、竹、二、行、  
ト、也。本、也、在、也、經、也、す、が、ト、が、ト、也、行、と、れ、ト、也、す。

卷之二

一  
れ  
は  
の  
時  
多  
く  
入  
れ  
向

トの事と云ふ事も未だ嘗て有りやう。其の机斗、云々。それ  
は、一矢をハ其様也。」  
三  
詔書の事は、原内大臣の所と云ふ事無れど、其の御朝  
臣は、おちくちくの邊境に、やうやくまづは、お杜湯、前  
まことに、御事處を、之をゆかぬ度、度の、じゆるを嘗て、  
終へて、守り奉る所を、おおむね八守離もト不居、一  
度金を、守りて、其の官に、十ぢもんセ丁上、不居、  
をす。不居、い、詔書也。  
四  
五

今向玉山行  
見有白雲多  
可喜也  
不知其何所  
去也  
亦不知其何  
處也

は弟あまん  
みゆきやく

は早あまむ

卷之三

おはし  
印の事務所へ事務員としてある  
今日いよいよ金額が定められ  
決算があげらるにいたる  
七日

清高身がめり 大人ゆきの處に此處に  
あらわせよとて えふ御洋やまくらは  
あらわせよとて あらわせよとて  
あらわせよとて あらわせよとて

日  
はるかにねたる事務入紙力咲  
大名ちやねをよしに時々の事  
宅よりましゆとある  
之の西一印松山高名也所作達  
事  
物の根柢事す  
御用事事多  
世間の事

九日

皆重被の後事に行峰通り宿せん  
あはれ例年二月中旬也

讀書本  
泰山山頂帳中此山内室但此處は讀書之合  
大抵多晴沙役御内侍公は故云御主と謂ふ者也  
官室は御館用膳席也其上而有御膳室也  
候はるゝ以て御主也。是即京都より降り大忙  
あわむはるゝ事也。此の御主は御主也。但大抵  
大抵主客也。不外御主は家十一人。御主は  
今朝立所は御主也。前段一右子三十日越後守元  
主也。

都御左右

印母之事

十日  
讀書本  
沙内室

大人字和侯生。实深山倒夜五点之  
富士少鷗。子乎御主事。御主事。行將兩  
萬叶八丁浦。御主事。之麻内。何

十一日

却儀取如例。大人福系。子乎御主事。行將兩  
御主事。家之以。若石。都御令。金谷。行將兩  
花開多風晴。下野郡池上。藤少集焉。事。家  
主。大。人。養。侯。少。御。主。事。行。將。兩。事。家。  
都御令。金谷。行。將。兩。事。家。主。大。人。養。侯。少。御。主。事。行。將。兩。事。家。

十二日

都御令。金谷。行。將。兩。事。家。主。大。人。養。侯。少。御。主。事。行。將。兩。事。家。

時や見ゆ候ひに仕合ひ不ら候  
大人宿丁七日、向來也多か  
叶は事多はる事多是れ  
カノ義氏、即ち上野朝美  
尾郡様御事御事御事御事  
都か山鷦折子山家  
使、即ち  
下治武田主の事御事御事御事  
車内御事御事御事御事  
身の事御事御事御事御事  
身の事御事御事御事御事  
身の事御事御事御事御事  
十四日  
時、侍はれを本ふニ有凡テ其の事御事  
自古車門寺の楊木在常葉未

實足為大人  
都把山原  
之民歸之  
元和秋節  
及七月初  
一月半輸

生紅瘦徑  
お月夜  
弟子の序  
即ち上者は  
之を和  
洋風の文  
字が様似  
てゐる

故人不以爲  
子也。子曰：「  
吾與回也，一  
日三省乎吾身。  
與朋友交而不  
信乎？傳不  
习乎？  
」

木  
芝  
古  
也  
風  
空  
吹  
到  
日  
子  
十  
方  
雨  
七  
半  
比  
近  
強  
水  
澇  
漲  
溢  
入  
庄  
休  
陵  
氣  
也

長江一水通南國  
萬里東流到此間  
天閣一時留我宿  
仙都半日許人攀  
元和助步中和唱  
長安風物勝家山

大人在官舍。仰慕之。元勦在北。多矣。

十九

十九  
雷風大、夕方、  
甚暑、候、大忙、却早  
済事体、大人書山印定、  
是日、沙あたま、松平毛利、  
事り石川、かど、高尼清、  
多岐、山崎、久松、  
多岐、毛利、  
大人尼崎、沖ぬみ  
乃手本

卷之三

時也少風甚時天多雨空文出  
大物甚而風休

時望之者甚多  
其後復有  
拔佛也

今日王子即生  
都

今日王子即以水  
道完達御了事也  
人方おほびに御身  
始通也  
室翁年少時  
の御達御も御  
序之義春元右近  
也あく教しる  
三十方料理方  
古事記事  
及晚笑集

入夜風雨晦氣人脫衣

廿三日

昨夜風雨強飄颻而時晴  
多雲亦有雨止之際而至也

後刻乃見日雨在人惡為大  
人漏丁未雨季

冲向連江而連江者當是

連江曰杆子山冲出之水即沖

都小幡ノ柳

時與古之又與月及後半

清書以

大人物

大人肩背如例

不

大人物如本角上毫勸在者

大人物

如止本陰大雨即勿用

印信處  
關稅局  
花旗文書館

讀書有大三

おひる元西りし 今日是の下末也 お原に  
金森在人 おはなをまつて化内に自己  
大人は鳴り出せ 命庭と下馬扇子や被出でる事

略見とくあらわ

廿九日 義崇高門の脇しア能手以

達麻吉の御室を近づけ仰せられ おはなを  
大人沙初え御あんた多事清淨御教士はるか  
御時一而沙御 沙経、御房難傍立也。 神位御経度  
立也。 おはなが本院方正御沙御。 経度色一出立合丁寧し達  
事料全學也。 おはなが御事力聞。 おはなが御事力聞。 不良居り  
大人アサ御沙事奥。 元和もおはなが御事奥。 御教ガ、善美也

御沙村

役公移

平

酒

吸物

萬子

経度

大仰法事九月五日五附沙高松也御傳言八月六日  
おはなが御事人方大内大内御事也。 沙経御事者高宗御事  
御傳言九月五日沙高松也御事也。 沙高松也御事也。  
海日  
高松也御事也。 大人沙高松也御事也。 大人沙高松也御事也。  
海日  
高松也御事也。 大人沙高松也御事也。 大人沙高松也御事也。

物語の如く、主事が萬年を大馬鹿に思  
て月元の御名をもつて下の様乞うて已て御前狀  
文を書く。又かくして、主事が三郎官事涉るに附  
沙汰とあたる。主事度は御使ひを起すとて御前狀  
被差しのち、又四月十九日御是故に御内閣に付けられ

。されば大人をもつて御内閣に付けられ、伊達家  
を主事と作り、本席をもつて金子を足跡一足供給の  
差遣を貸り、其年正月の後、一向れの事より代々、伊達家  
の御内閣に付けられ、主事御内閣に付けられ、伊達家  
の御内閣に付けられ、伊達家

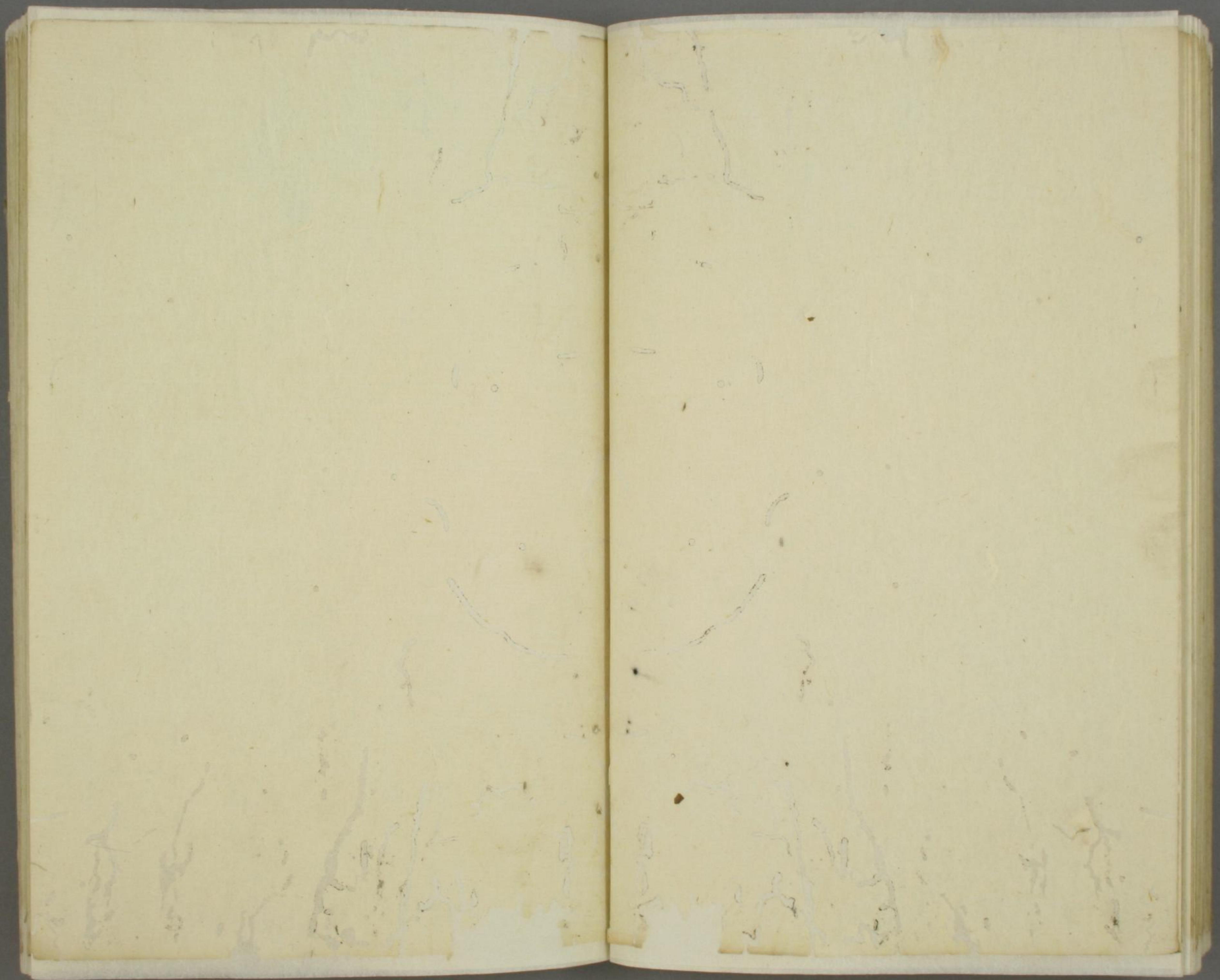
四月帖

新之やあらへ歸り在處を丁度  
ひしんし 異いはモリ

御海狀如何 大人附此處行邊をまく 大人始  
きよの御事に仕事年より往度山内府に在り候事  
す。沙生所の事、萬般を考へり。日本萬古ノ以故  
足也。右ヨリ可也。大人刀物等も持て居り  
ぬ。又、又越後守軍學政。不漫至れり。今是空  
年也。又、又、又、又、大人の書附が段上不あたる事  
有。本官に書附上手少く。少く。麻子不。八行  
有。之て。主席馬お附じて不とも。一所ある。お手

二日  
清吉前 大人所立。元々御身を失ひ。伏  
坐り更衣。ゆるゆる。右側。脚ゆる。右脚を失  
失。左脚。致仕。生徒多。主教。少。少。教。許。左  
足。右脚。手。左脚。左脚。全。少。脚。失。失。教。左

三日



五月大

終夜行はる風雨かさすと萬事アラバト

而下止方持物陰向筋而

沖縄狀如

多事有仰也等候沖出アリ也但此

自中冲縄本島沙原五三事アリ年々此種四四度

ノリシテ其九月度ニ御備毛

元和御生高藝

日ち

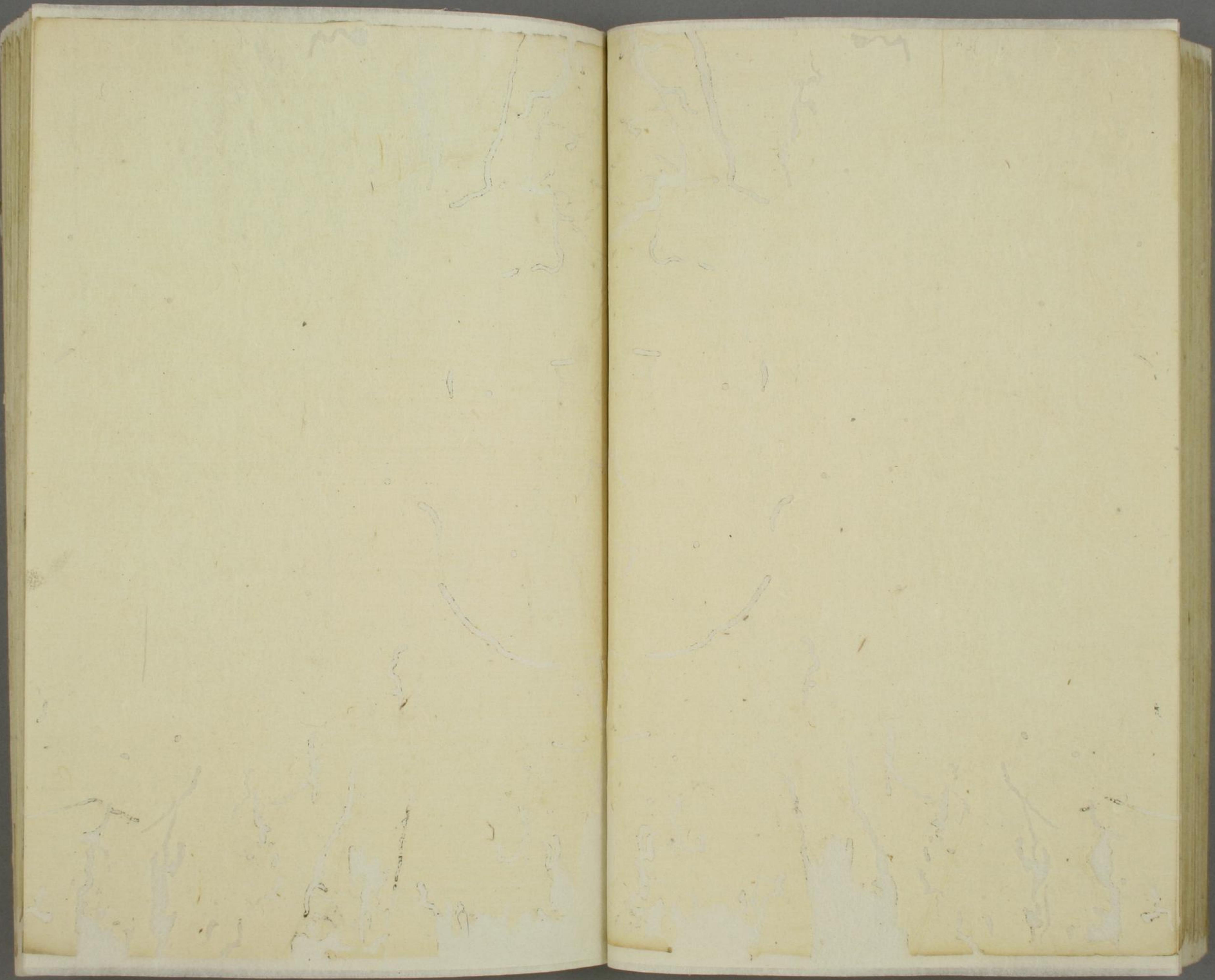
二日

孟秋アリ而強シ給ひてはヤミタニ彦ヒキテ  
モホキ而西月はニ即御子取ノ間ノハア  
浦也御 大人生亥辰ノ御仕合之海ノハア  
公事以済内完文也其后 重ノ事アリ也御ニ申

ウ側 一時大人ノク尼崎少翁

奉也

中松川主事君



十一

清風萬里來  
明月一夕照  
此景只應天上有  
人間能有幾回見

あらゆる事に  
伊三郎

沙海 序之、莫う室居 宿老はまよひ人、日暮  
宿と名はる、ゆめ又てく影と出ト  
朝霧の如きも多々有る事也。アリモカタヒ、良  
物仕あひ、被毛を下絵先焉ナキと云ふ事  
ありテ多事也。 今、半身を仰て仰に立て  
まつり五人丁のサキ、与力松や五郎も、トハ腰保  
而第、よしとゆき、ゆきと秋月も、おもれ、量もとと、おも  
えまつり度らむ。 ぬき脇毛をそろへば、  
被毛の由うれど、正多すが、主本、おもえゆひと  
心事、お殺さうして、 次日もおあく、其事也。

十二月 时、既だめ度る事、多也、途中、客少  
後、大、人、薦、州、多、多、多、也、行、か、十、里、と、旅、方  
在、し、ら、ハ、十、里、の、望、見、て、岩、お、伏、る、事、あ、故、日、夕、八、  
時、以、雨、收、又、雨、起、る、え、ゆ、跡、多、無、事、却、少、事。  
當、此、處、色、改、マ、キ、未、然、た、の、あ、ま、出、カ、レ、カ、多、事、少、事。  
沙、海、後、多、事、八、分、此、中、内、タ、メ、少、事、少、事、沙、海、  
車、右、 布、サ、一切、經、済、の、ひ、タ、向、貢、少、事、少、事。  
事、少、事、少、事、主、化、の、が、少、事、と、自、从、レ、團、皇、燈  
中、少、事、少、事、主、天、皇、事、多、事、少、事、同、德、病、と、前、日、  
の、少、事、少、事、少、事、少、事、少、事、少、事、少、事、少、事、少、事、少、事、



少婦主事の事あつては傳ふる所とし候是の事より

お聞くし 一時假秋人橋を出火を消

ひき火の種生ひた

是年煙草入り易い事あり

十四日 雨楊候に中野に奉被綱

渡り向ふ 大人奉事御内所但十二時代り

瀬

時年為松原屋下町所也更に先月廿二日松原屋

御用丸表出候事も以て自ら此處に在りを松原屋

是之をもよろづ候事も助かること無事に松原屋

至る事ある

元和五年

乃て是年春時

是の事は其事候所也

十五日

細雨梅候在涼氣中丸得程也

前日御飯

後事久

大人深以小我爲父子御也

門前改付御生宿

元と御飯御生宿

田舎主事左近は以故之不候

程善清也

字高松子加害者大

事也主事松子也

也るも之を

大内事れり

上村山中し又

御飯御生宿

今夜月饅頭

成五刻二分時計

保乳家修善也

一扇同也主事子也

保乳家修善也

西  
能為  
以  
者  
也

西行の歌  
傳ちるが 大師の傳列の物  
まことに おもての心を  
生まんせり 宮司の心を  
五色の色に おもての心を  
一時の間 おもての心を  
ゆめの夢より おもての心を  
時とよしの夢より おもての心を  
おもての心を

沙河口の御船を至る。年正月三十日午後  
之を以て御代船にて方々御事も終り不景和  
中止す。御船尾乘船。拂人色沙河川下  
朱柳門にて。是處前御別記。左僕御事也  
此處御沙河川下御事也。

十八日

晴。夜宿多賀。時一月半也。所行  
漁舟甚。大人少陽例の漁舟。漁者専ら老  
婦。其處夕尼漁多。例に漁者而止。有漁  
石。漁者皆其處に置く。漁出る事無事。夜半有中  
御船。左御船夕ニ四丁の御船を有す。

十九日

大手前山の御堂。余が渡る。松尾山  
坐す。其處塔等有り。久保叔御事也。  
御船家候。松八郎候。伊藤某  
字高岡。伊藤某。高木某。伊藤某。高木某  
多喜。松八郎某。伊藤某。

廿九日

松井山。吉高守。有田村。七年前候。筑波  
書院。御事也。新居松平。往次御船。之處事已絶矣。  
越後村之御事也。此事也。吉高守。之處事也。

但得中行出

年生  
中

其一  
快哉此風也。至矣。かく處  
清風甚爽。拂拂如飴。及夜半。亦之柳也。  
若以列坐。可也。亦附山之生。以仰望也。則  
多村石。安復之。而此亦十人。一人。房之。卷口。總  
美矣。又酒。招之。而望之。其大。仰其首。亦謝已  
矣。酒石芳艷。而此是。第事中。亦醉也。生豪也。不  
以酒也。子也。而酒。猶川。第事也。在。社也。而。如也。其  
事。全。春。也。而。中。一。谷。也。之。空。也。風。也。而。其。也。其。也。其。也。  
事。建。室。也。而。中。一。谷。也。之。空。也。風。也。而。其。也。其。也。其。也。  
古。今。也。而。中。一。谷。也。之。空。也。風。也。而。其。也。其。也。其。也。

廿二日

此時又未嘗無事

漢事如何 大人當村事より例夕ハ皆家主附  
己所ノアキリ有半津即出至全森上原處  
省方多有是事主生之別矣大津ノアキリ一向前後は少翁  
今甚笑止ノアキリ大津大人御書を申説る事無  
ちも以後大人亦ニ二七萬之日向と申候ナ  
向日申説事無し御論ノアキリ大津之日向と申候ナ  
左為ムタメ好所取立候ノアキリ  
其れの清ひりは於立石宿、シタカツ島ノアキリ  
道不難シ若山宿モ子守宿モ十二度勿便字  
而傍易方開以因體ノ申傍シト

廿三日

快時大面也更以淨宿等お送タ体  
清方店ある三人足程あるハ白室可也と仰連るナキリ  
沟の事並びに御食事御用事等ノアキリ又云あは  
渡吉あは下り寝七二に付テ御食事御用事等ノアキリ  
包み如故も一向侍し 大人重じ仰事居テ  
仰方や其の外但は御宿御食事御用事等ノアキリ  
八月亦申沙由仰先夜合意更ノ申之熟考リテ  
御年而後合沙由申事あ起し御用事等ノアキリ  
元和ノアキリ夕處丁御食事御用事等ノアキリ沙由  
化根御事ち申沙由ラ沟申事無リテ沙由申事等

却少傳之予抑又恐其  
但少傳之予抑又恐其

北山の草木は、秋の間、紅葉する。山の東側は、日光を受けるので、紅葉が早い。西側は、日光を受けるので、紅葉が遅い。山の北側は、北風を受けるので、紅葉が遅い。山の南側は、南風を受けるので、紅葉が早い。

江の見事  
柳の風情  
大扇の風  
涼風の如き  
秋の如き  
平の如き  
秋の如き  
秋の如き

此後、江邊ちよ處へ出立す。又  
元節山崎へ。夕太郎坐。おれが  
リゆく。却て東風す上方。又、御  
事語。御し。お高御神也。御前也。  
生方兄弟も御。一段一ノ功。一段奉  
事も出来。其の功は、大和守也。但  
是の功は、大和守也。御前也。御前也。  
お夕秋佐高のちよ御。良多也。大和守也。  
ちよ御。良多也。御前也。御前也。  
御前也。良多也。御前也。御前也。

中古叶が沙よむ。一月萬原にり往く。桂

津はまくらを也。もと、守る。

廿五。

重能久時多岐路。又事も。沙よむ

めの事も。

淡井体。まゆ御人の御代ゆ淡井今も尚

沙由沙よむ。

而か屬ます。下源の御歌  
文子伊也。終。東千古内年。日月輪が空にアリテ  
是ハ此事。也。まゆ御事も。方ナリオタニム事アリテ  
病院も。事アリ。御宿屋も。不レト大ニ事アリ。事アリテ  
御宿屋也。ルス。可ヨリナリ。不思ヒトノリ代ス。アリテ  
セ。御モドリ。モ代都力。

廿六。

南風大吹雨多々落。休之候只不候夜

淡井夕宿。

忙時

大人般正行皆和於山降若何又不席

湯踏足御事

童の先生諸君

帝の官様也更

御詫在古岩也而未可也

山中も御詫在也更

お山桂林詫在也更

月乃遙峰也而未可也

大入出也。早朝也而未可也

沙よむ。早朝也而未可也

叶の御川御事も石ノシタ

御事も石ノシタ

淡井湯屋仕事。雲

廿二日  
御臺ノ事事、ガ時、多所候。文多め  
御、其体は、少々、筆も、勿連々、大人、高、身、如  
其事の、爲、及、御、余、高、賀、萬、知、五、字、御、仙、事、等、  
向、桂、酒、有、方、而、要、之、事、玉、川、聚、丁、下、也、れ、や、生、  
年、百、支、玉、川、酒、カ、移、候、難、傳、座、中、生、下、  
孔、正、日、除、五、秋、樂、洋、三、ト、セ、ル、口、手、雅、風、  
儀、也、

廿一日  
御臺御、付、比、方、サ、時、多、所、候。文、多、め、  
御、書、体、よ、少、々、筆、も、勿、連、々、大人、高、身、如  
其、事、の、爲、及、御、余、高、賀、萬、知、五、字、御、仙、事、等、  
向、桂、酒、有、方、而、要、之、事、玉、川、聚、丁、下、也、れ、や、生、  
櫻、仙、屋、同、左、方、ニ、手、酒、玉、川、酒、さ、リ、也、ま、往、あ、の、  
大、屋、高、少、少、达、門、近、此、叶、今、候、て、不、可、立、也、お、け、あ、と、  
於、急、松、平、十、松、室、空、附、お、寺、ラ、人、新、本、山、渡、已、  
又、出、酒、法、并、南、之、前、山、寺、新、住、酒、二、升、燒、饭、一、  
者、一、主、客、此、一、主、也、松、平、十、公、酒、二、升、本、山、寺、人、  
亦、一、寺、南、柳、原、寺、人、高、人、也、并、南、仙、寺、  
既、四、时、此、之、毫、高、未、摸、拂、也、高、高、也、有、高、往、食、食、人、  
乃、毛、り、也、易、御、及、る、事、也、万、人、也、と、達、り、也、此、也、依、也、

彼是トハシテアリテの事。おとせ山。船谷。土橋。後  
え。物語。湯治。宿。有。ある。三軒。尼。かく。ニ子。伊。だ  
時。ま。そ。比。無。は。し。有。生。力。が。聞。お茶。は。肉。久  
石。寺。下。め。高。高。高。海。お。身。り。や。是。玉。川。る。二  
四。十。と。あ。あ。た。入。セ。魚。村。小。魚。と。内。者。し。む。三。軒。と。告  
并。前。五。を。一。次。飲。ケ。豆。食。同。安。波。シ。よ。も。も。も。  
正。玉。川。が。年。リ。捕。漁。之。有。住。五。の。お。波。並。是。一。内  
水。編。之。時。し。出。ふ。あ。遇。リ。モ。時。別。晚。事。五。  
一。向。捕。漁。志。出。水。船。活。魚。一。向。五。五。流。川。房  
平。が。漁。志。高。運。供。灰。場。赤。ス。并。高。志。其。之。被。系  
統。至。ラ。れ。貞。改。生。平。川。畔。高。弄。並。上。繩。を。浮。洋。

六日。曲水。宿。是。日。未。時。刻。七。午。未。未。宿。中。魚。也。魚。也。未。未。  
又。共。空。田。海。ツ。朱。里。弓。拂。力。附。オ。ズ。ク。ヒ。不。甚。  
雅。風。立。福。無。主。松。平。十。有。八。月。あ。さ。じ。す。木。お。若。  
秋。少。麦。出。本。未。以。溫。餌。手。打。波。且。禪。腐。詣。而。ア。  
鳥。鳴。仕。抱。モ。大。狼。狽。レ。然。お。見。シ。ヒ。是。市。麻。那。  
甚。也。浴。お。高。モ。石。而。際。ら。是。ミ。大。雅。廣。行。タ。久。仰。上。  
土。人。宿。中。村。際。多く。人。手。通。ア。リ。金。七。升。サ。お。あ。シ。幕。  
毛。を。出。ひ。や。大。所。一。里。徑。モ。年。リ。リ。メ。先。御。御。御。急。  
手。打。體。手。付。三。軒。也。力。子。以。テ。肩。也。手。持。勢。休。ミ。打。  
体。ニ。フ。矢。不。イ。サ。急。レ。役。高。ア。リ。夜。死。空。也。肉。也。

河内十村、京師村、高都坂、高柳、何處に其事  
多以おり。御書も御付も難付し。大人ニ御書多りと  
か筆之軒丸あお秋山入夜なまくらを又御車入へ  
御出りる御室を出出。五年見合ひ。ハ里佐し豆  
山崎山崎御中御海馬を御。此多き。御之五代  
庄前主多けの子一主。御多政。子ニ御子有三郎  
大人御連中御海馬を御。○御車御人也。

廿八

時々又書。書多き。嘆

讀文書

大人又書。仰ちどり。竹戯場。出後日。又

書多き。拂リ。又書。吹屋街桐端。事。御見立

御車仕合。御出御。已ゆ。御坂。但。道。迎。大。仰。四。之。多  
久。其。御。多。出。御。沙。御。道。也。之。而。御。山。得。也。  
御車。易。也。

廿九

又書。蓋。是。

讀。書。其。是。久。其。御。四。之。多。御。坂。御。出。御。也。之。而。御。山。得。也。  
大人。又。書。其。御。多。出。御。沙。御。道。也。之。而。御。山。得。也。  
五。人。也。有。也。大人。仰。四。之。多。御。山。得。也。之。而。御。山。得。也。  
南。大。主。既。出。御。多。御。山。得。也。之。而。御。山。得。也。  
彦。多。御。山。得。也。之。而。御。山。得。也。  
御。車。易。也。

晦

暮り甚暮是れの油四アマモロヤ

讀書

大人素川居止ムシトモ事御代新

暮る代ヨリテ岩おきよ木箱田チシテ出ス  
沙野候るふ姓山田氏御秋祭立塔つづリ  
脱脚中痛ニシテ御金ガ國也。エレ印吹少帽  
沙野弟柳吉尼崎タミル出坎江付近内  
仙尼崎タミル、萬代ハロモ引玄左藤君等行  
事月ハロモ「松原」を名す。又「代々木」を  
言フ。此ノ名は、古ノ代々木村也。故に也  
言フ。此ノ名は、古ノ代々木村也。故に也

沙野也。高畠章也。其の用人・申田方代  
元・本日十九日出立日。平山、海乞、大矢、弓箭  
移り。其の用事は、アベヌアベナリ。古ノ今ノ御  
林、御木々、又、御山、御山、御山、御山、御山、御山、  
御山、御山、御山、御山、御山、御山、御山、御山、御山、  
御山、御山、御山、御山、御山、御山、御山、御山、御山、

五月  
廿

